

令和 6 年 5 月 28 日現在

機関番号：15401

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2023

課題番号：17K13916

研究課題名(和文) 小学校低学年児童の暴力予防に寄与するアサーション・トレーニング・プログラムの開発

研究課題名(英文) Development of assertiveness training program to contribute to aggressive behavior prevention in early elementary school children

研究代表者

高橋 均 (Takahashi, Hitoshi)

広島大学・人間社会科学研究科(教)・講師

研究者番号：40523535

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、小学校低学年児童対象とした、適切な自己表現力の育成や教育現場に即することをめざしたアサーション・トレーニング・プログラムが開発された。アサーションの構成の検討、アサーションを育成する方法の検討、アサーション育成における指導者の役割の検討を含めて研究が行われた。特定の時間のプログラム内容だけでなく、学級風土づくり、よりよい般化、普段の学校生活に関する支援等の重要性について考察された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では近年の小学生の暴力等の状況をふまえ、暴力予防、適切な自己表現力の育成をめざしたアサーション・トレーニング・プログラムの開発研究が行われた。この分野ではあまり研究が進展していない小学校低学年児童を対象とした研究であった。アサーション・トレーニング・プログラムのさらなる工夫を研究していくという今後の研究の発展に向けた課題が見出された。

研究成果の概要(英文)：In this study, assertiveness training program was developed for early elementary school students, aiming to develop appropriate self-expression skills, and adapted to the educational setting. The study included a consideration of the structure of assertiveness, a consideration of methods for developing assertiveness, and a consideration of the role of the instructor in developing assertiveness. The importance of not only the content of the program at a specific time, but also the importance of creating a classroom climate, better generalization, and support related to everyday school life was discussed.

研究分野：教育心理学

キーワード：アサーション

1. 研究開始当初の背景

近年、他者の気持ちに配慮した行動のできない子どもの問題が指摘されている。

2015年9月17日付の日本経済新聞の記事「小学生の暴力 過去最多 昨年度 1.1万件 低学年で増加顕著」によると、文部科学省の「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」で2014年度に全国の小学校で起きた児童の暴力行為は4年連続で増え、過去最多を更新したことが分かっている。全学年が増加傾向の中でも特に低学年が目立つ。文部科学省は「早い段階から子供に寄り添った対応が重要だ」としている。

このような問題を解決するため、これまで適切な自己表現力に関する研究が行われてきたが、先述の全国的な問題行動等の調査結果から考えれば、十分な教育成果に繋がっているとは言い難いと思われる。その原因として次の2点があると思われる。

まず、適切な自己表現力に関する研究分野が複数あり、また小学校低学年児童対象の適切な自己表現力を育成する実践的研究があまり進展していないということである。適切な自己表現力の育成の重要性を考えれば、小学校低学年児童を対象にしたアサーション・トレーニング等の実践的研究の発展が必要である。

また、小学校低学年児童の発達に即したアサーション・トレーニング・プログラムが十分に開発されていないことに加え、小学校低学年児童のアサーションの評価方法が十分に確立されていないことである。小学校低学年児童の攻撃的な行動は小学校に入学して突然生じるものではない。研究代表者が7年にわたり幼児教育・保育の現場を観察したところ、保育者が子ども同士の喧嘩の仲裁に追われる姿が多かった。このような状況をふまえて研究代表者が行った研究(高橋, 2012)では、保育者経験者はアサーション・トレーニングの導入に肯定的で、特に年長児からトレーニングが可能だという考えを持っていることが明らかになっている。

したがって、小学校低学年児童を対象としたアサーション・トレーニング・プログラムの開発を研究していくことが必要である。

2. 研究の目的

適切な自己表現力の育成は、今日の教育において重要な課題である。

本研究では、心理学のアサーションに関する研究を背景として、小学校低学年児童対象の適切な自己表現力育成プログラムの開発を行うことを目的とする。

3. 研究の方法

アサーションを評価する方法の現状を検討した上で、小学校低学年児童のアサーション尺度を構成する。小学校低学年児童の適切な自己表現力の育成を目的とした教育の解明・アサーションを育成する方法の検討、アサーションの構成の検討、アサーション育成における指導者の役割の検討、アサーション・トレーニング・プログラムの開発、検証を行う。

4. 研究成果

(1)

子どものアサーションを評価する方法の現状について検討するため研究動向を分析した。アサーションは尺度による評価が中心であることや、児童対象の研究が比較的多いことが分かった。自尊感情やストレス等との関係が検討されていることから、それらがアサーションの尺度の妥当性を評価する上での基準となる可能性を持っていることが示唆された。

これらの研究や観察、先行研究を参考に、小学校低学年児童の発達をふまえて、アサーションの原尺度を構成した。

(2)

まず幼稚園教諭を志望している大学4年生を対象として調査し、幼児の適切な自己表現力を育成する方法への思いを分析した。調査参加者から表現されたイメージや言葉は普通の園生活で可能な支援に関するものであった。小学校低学年児童への支援との違いも尋ねた。その結果、幼児と小学校低学年児童への支援は基本的には同じだと考えられるが、小学生はルールや学級目標を通して教育するというイメージがあるという考えが明らかになった。

(3)

小学校の教師を対象に小学校低学年児童の適切な自己表現力を育成する方法への思いを調査した。調査により、トレーニングや、よりよいモデルを定着させることは土台や基礎であり、それに対して学校生活における発表は上位に位置づき、子どもたちに判断させる場合は活用位置づき、また認めることと学級風土づくりはレベルの高いものと捉えられていること等が明らか

になった。

アサーションを育成する方法として普段の学校生活に関係する支援が挙げられた点については、保育者を対象とした先行研究と同様であった。

このように明らかになった学校生活での教育活動や先行研究もふまえて、小学校低学年児童対象のアサーション・トレーニング・プログラム案を作成した。

(4)

小学校低学年児童におけるアサーションの構成を検討するため、小学校教員を対象として小学校低学年児童の自分も相手も大切にしたい自己表現が必要なのはどのような場面かということについて調査した。調査の回答についてクラスター分析等を行い、「助けを必要としている児童に手を差し伸べる」、「対話的な学び」、「公共心」、「素直な謝罪」、「反応を返す」、「自分を支えている場所・物」に関する場面のアサーションや、「反省」、「承認を求める意思」、「配慮する」、「ルールを伝える」、「希望を伝える意思」に関する場面のアサーションが明らかになった。これらの中には相互に関係性があるものもある。また、そのうち「反応を返す」、「ルールを伝える」等の対人関係において重要で基本的なアサーションは、小学校低学年という発達段階における特徴と考えられた。

(5)

子どものアサーションを育成するプログラムの検討を行い、近年、子どもを対象としたアサーション・トレーニングに関する先行研究では様々なプログラムが行われていることをふまえ、子どものアサーションを育成するプログラムの動向について考察した。子どもを対象としたアサーション・トレーニングに関する研究は小学生以上の年齢の子どもを対象としたものが多い。アサーション・トレーニングに関する研究では認知だけでなく実践的な活動も大切にされている等、工夫されたプログラムが行われている。

したがって、これらの研究成果をふまえながら、対象とする子どもの状態もふまえてさらにプログラムを工夫していくことが今後の研究の発展では重要だと考えられた。

(6)

子どものアサーションの育成における指導者の役割について検討を行った。以前から言われている例えば幼児教育・保育では「保育者自身がアサーションを身に付け、幼児の良きモデルになること」(高橋, 2012)などにも関連すると思われるが子どものアサーション育成において指導者の役割は重要と考えられ、子どものアサーション育成における指導者の役割について考察した。

(7)

アサーションのよりよいモデルについて学習し、ロールプレイを通して相手の気持ちを考えることを意識するようにする等といったプログラムについては、児童の対人関係において重要なアサーションの場面に着目することの重要性の視点から考察された。

また、特定の時間のプログラム内容だけでなく、子どものアサーションの育成における指導者の役割や学級風土づくり、よりよい般化、普段の学校生活に関係する支援等の重要性について考察された。

(8)

研究期間の中でコロナ禍の影響を受けたが、その中でアサーション・トレーニング・プログラムのさらなる工夫を研究していくという課題は今後の研究に向けた契機になったという面もあると思われる。

小学校低学年児童対象とした、適切な自己表現力の育成や教育現場に即することをめざしたアサーション・トレーニング・プログラムが開発されたと思われるが、本研究は学級全体で行う形のアサーション・トレーニング・プログラムについての研究であった。一般に学級には様々な児童がいると考えられることから、さらに全体と個への支援のバランスの取れたプログラムを追究することも今後必要と思われる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Takahashi, H., & Ito, Y.	4. 巻 27
2. 論文標題 An Analysis of Trends in Research on Methods of Assessing Children's Assertion	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Hiroshima Journal of School Education	6. 最初と最後の頁 1-7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15027/50608	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 高橋均
2. 発表標題 小学校低学年児童のアサーション・トレーニング・プログラムの検討
3. 学会等名 日本感情心理学会第32回大会
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 高橋均
2. 発表標題 子どものアサーション育成における指導者の役割の検討
3. 学会等名 日本保育者養成教育学会第7回研究大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 高橋均
2. 発表標題 子どものアサーションを育成するプログラムの検討
3. 学会等名 日本保育者養成教育学会第6回研究大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 高橋均
2. 発表標題 小学校低学年児童におけるアサーションの構成の検討
3. 学会等名 日本精神衛生学会第36回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 高橋均
2. 発表標題 小学校低学年児童のアサーションを育成する方法の検討
3. 学会等名 日本パーソナリティ心理学会第28回研究大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 高橋均
2. 発表標題 子どものアサーションを育成する方法の分析
3. 学会等名 日本保育者養成教育学会第3回研究大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 高橋均・伊藤優
2. 発表標題 子どものアサーションを評価する方法の研究動向の分析
3. 学会等名 日本保育者養成教育学会第2回研究大会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------